講演会から

平家物語の時代と神戸

作家　永井　路子さん

福原遷都は歴史の転機

平清盛がなぜ福原に都をつくったのか。なぜ、そこで貿易を行ったのか。私たちは戦後、日本は貿易立国しかないと実感した。その先覚者が清盛ではないか。

当時、瀬戸内海には外国の船は入れなかった。話はさらに昔にさかのぼるが、白村江の戦いで唐に負けた日本は、攻め込まれたら困るので九州の太宰府だけを貿易地として残した。それからずっと瀬戸内海に外国船は入れないという考えが続いた。

しかし、太宰府で行う貿易は多大な利益をもたらしたので、太宰府の長官は平安朝時代の公家たちのあこがれのポストになった。

清盛の父忠盛は密貿易で大もうけをし、瀬戸内海の海賊も手なずけていたらしい。実は、清盛も長官に任命されている。太宰府からの貿易物資は瀬戸内海を通り、神戸の大輪田泊に着いて京都に運ばれた。

さらに、清盛は厳島神社を造り、いよいよ瀬戸内を自分のものにした。それから大英断をして外国船を入れた。大輪田泊も改築して港湾設備を持つ経島を造った。今の関西空港みたいなものだ。西へ行けば厳島、東へ行けば大輪田泊。こうして平家は瀬戸内海を支配した。

福原は清盛の別荘地だった。本当に都になったかどうかは議論が分かれるが、重要なのは、海に向かった都が、日本で初めて神戸にできたということだ。これをみなさんにしっかりと認識してほしい。海に臨んだ都づくりは、その後、鎌倉時代にも影響を与えた。源頼朝に福原のイメージがあったのではないか。

福原というのは、日本における都の発想を大きく転換させた重要な都だ。神戸には福原以外にも、生田の森や一の谷合戦、敦盛塚もある。平家の興亡のすべての舞台が神戸にある。私は遠くにいる、ぜひ地元のみなさんにはそれを大事にしてほしい。福原が神戸にできた時代は、実に大きな歴史の転換期であったということを大切にしていただきたい。（御影公会堂で開かれた歴史と文化を考える市民講座から）

メモ　一九六四年、鎌倉時代を描いた「炎環」で直木賞受賞。以後、歴史小説の分野で菊池寛賞など受賞多数。主な作品に「朱なる十字架」「雲と風と」「政子」など。鎌倉市在住。七十二歳。

神戸新聞　1997年10月16日付　24頁・広域版より

なお市民講座に先立ち、９月２日から13日にかけて神戸新聞誌上で「みなと・千年」と題して、開港以前の神戸の歴史にさまざまな角度から光をあてた連載記事が組まれ、10回にわたって史料ネットのメンバー（奥村弘、坂江渉、高橋昌明、藤田明良、森田竜雄、大国正美＝掲載順）が執筆しました。